

## 改題の辭

綠丘學園と共に長い歴史と傳統とを誇る吾等の研究發表機關たる「商學討究」が「北方經濟研究」と改題せられて近く世に送られることになつた。回顧すれば三十有餘年の昔、小樽高等商業學校が創立せられたとき、産業調査會が開設せられ、北海道産業の資料蒐集、調査論文の發刊に努力し、各方面より多大の關心を寄せられてゐた。昭和七年にそれが改造せられて「北海道經濟研究所」となり、從來よりも研究に重點を移すことになり、研究發表も益々旺盛に赴いたのであるが、支那事變の進行につれ、大陸の經濟問題に關心を持つ傾向が次第に濃厚となり、北海道だけでは狹隘に失するといふ説が擡頭し、遂に昭和十六年に「經濟研究所」と改稱するに至つた。然るに大東亞戰爭に刺戟せられて世間の眼が悉く南に向けられるに及んで、北方の經濟は殆ど顧られなくなつて來た。是に於て、地域的分擔からいふてもこれは我が學園が擔當すべきであるといふ自覺が生れ出で、今春「北方」を從來の名稱に冠することになつた。

これ迄の経過を見ると、研究所は隨時刊行物は出してゐるが定期發刊の機關を持たなかつた

のである。學園には「商學討究」といふ定期的發刊の研究發表機關があつた。これは創立十五週年記念事業として發足したもので、同窓會と校友會との支援のもとに大正十五年七月創刊號を振出しに第十八卷まで續けられて來、此の間創立二十週年記念論文集、創立二十五週年記念論文集、百年忌記念マルサス研究、戦争と經濟、國家と經濟、總力戰經濟の研究等合冊特輯をも上梓し聊かながら學界に貢獻した積りである。併し商學討究と研究所とは全く別箇の存在で何の連絡もなかつた。勿論同一教授が雙方に關係してゐたといふ事實はあるが、その場合でもその各々に對し別箇の對象への關與と考へてゐた。これは何でもなしの小さなことの様に一見思はれるが、それは必ずしもさうではなかつた。それはほんの短期間であつたが、雑誌は商學討究委員の手で編纂せられ、研究所名で發行せられた時代すらもあつたが、どこまでもそれは研究所自身の機關たる性格は持つてゐなかつた。かゝる過程を経て此の度北方經濟研究所の新發足に當つて研究所と發表機關とを結合せしめたことは永年の懸案が實現せられたのであり、今後研究所の活潑なる發展に期待せられて居る所である。斯の如く雑誌が研究所所屬となつた以上、その名稱も當然「北方經濟研究」と改まるのは自然であると思ふ。敍上が今回改題せられた経過と理由とである。

然らば改稱改題は單に外形上の問題であるかといふに、それは決してさうでない。又さうあつてはならぬのである。世に無用の用といふことがある。分けても學問にはそれが多いのであるが、用無用は時と所によつて定まるもの、それは本質的に固定不動性によるものではない。昨日の無用が明日有用の尖端を行くことになるかも知れない。随つて學問は有用性の角度から批判せられるべきものでない。であるが故に、學堂は常に靜寂、學者は自由に真理の探究に一意専心邁進し得ることが極めて望ましい。併し超然世間と絶縁して象牙の塔に立籠るだけが眞の學者の本分と心得るも如何かと思はれる。時と所とを超越した普遍の眞理探求に餘事を顧ないのも確に一つの行方であるに違いないが、差別觀に住して地に足のついた研<sub>ブ</sub>に没入するのも亦學者の一進路たるを失はない。今我々が北方經濟と地域を限定したことの中には具體的問題を對象として國家と時局とに關聯の深い研究を意圖としてゐることが含まれてゐるのである。

學問の研究に當り、孤獨端座、靜思默考、廣く文献を漁り、調査實驗を重ねて餘人の企て及ばざる殿堂を築き上げるも學者の一大快心事であらう。併し緊急の要望に對應する研究、若くは主題の範圍又は複雑性が分掌研究、綜合研討の二つを併用するのを効果的とする場合が鮮か  
らずある。そして一群の學者が協心戮力、共同研究により大伽藍を建立することも亦更に大き

な歡喜でなくてはならぬ。學園に繋る新進氣鋭の教授が内省と自覺と熱意とから、同じ心に融合結實して時局と關聯の深い廣範な主題を選び相携へて今度共同研究に乗り出したのである。それは愛國心の發露であり、又純粹無雜な至誠顯現でもある。

今や太平洋時代の生れ出づる惱みに直面して戦局は倍々危急の一路を辿り、敵機屢々國土に迫る。レイテ島を廻る決戦は大勢を支配する、此の重大時期に當り、突如神風隊の清澄無比の赤心、忠誠の極致、壯烈身骨を碎いて悠久の大義に生きたる忠魂義膽を耳にし、電撃骨髓に徹し、感憤腦漿を搖り、茫然自失、泪さへ泉絶え、襟を正す暇もなく、只管拜跪低頭、噫忠烈！嚴肅なる此の現實の前に國民齊しく神國斷じて亡びずの信念いや鞏固なるを覺えたことであらう。同じ 皇恩に光被せられたる吾等學究の徒、必死捨身、生還絶無の氣魄を以て學道に突進、太平洋時代の性格を我が肇國の精神顯現のものたらしめ、忠靈の遺勳を萬世不滅たらしめなければ我々の本分を盡せるものといへやうか。誓つて大東亞戦争を完成せん。吾等の新發足はその意に外ならない。

昭和十九年十一月三日、明治節の夜之を記す

苦 米 地 英 俊